

2018年6月10日の説教（要旨）

聖書：ローマの信徒への手紙 2 章 1～11 節

説教：「神の裁きと赦しの豊かさ」 日本キリスト教会鶴見教会牧師 高松牧人

「だから、すべて人を裁く者よ、弁解の余地はない。あなたは、他人を裁きながら、実は自分自身を罪に定めている。あなたも人を裁いて、同じことをしているからです」。ローマの信徒への手紙 2 章はいきなりこんな言い方で始まっています。古代のギリシア・ローマ世界では、相手を論駁し説得するための問答や対話術が盛んであったと言われます。パウロもそのような方法を駆使しながら、まだ見ぬローマの人々に対して語りかけ、人々をイエス・キリストの福音へと導こうとしているのです。

パウロは、神の被造物でありながら、神を忘れ、神ならぬものを拝む人間の愚かな姿を 1 章 18 節以下で語ってきました。しかし、唯一の神を創造主として信じているユダヤ人たちは、これらの言葉を安心して聞いていることができたかも知れません。自分たちはそんな偶像礼拝をしていないし、享樂的な生活をしているわけではない、とっていたからです。ところが、パウロはそのように思っている人たちに急に向きを変えるようにして、「あなたは、他人を裁きながら、実は自分自身を罪に定めている」と語り始めたのです。

けれども、このパウロの語りかけは、当時のユダヤ人だけでなく、新しい神の民として招かれている私たちキリスト者にも向けられているのではないのでしょうか。私たちは神さまのことを知っている、信じている、キリストの言葉を聞き、信仰によって罪赦され、正しさを追い求めて生きている。そう言いながら、いつ知らず、そうでない人々をさげすみ、裁き、他方自分自身の罪についてはきわめて甘くなってしまうのではないのでしょうか。ここではそんな私たちの姿が取り上げられているのです。

人間が一度も学んだことがなくても、ちゃんと身に着けている技術は人を裁くことである、と言った人があります。賢い人は賢い人なりに、愚かな者は愚かな者なりに、裁くことを知っているのです。しかもそのやり方は、謙遜なふりをしながら、なかなか巧妙なのです。しかし、自分のことは自分が一番よく知っていると言いながら、私たちはしばしば自分のことが見えてはいないのです。

イスラエルの歴史において最も偉大な王であったダビデが、自分の忠実な部下ウリヤの妻バト・シェバに魅せられ、彼女を王宮に召し入れ、子どもをもうけ、邪魔になったウリヤを戦場の最前線に送り込んで殺してしまったとき、預言者ナタンは神から遣わされてダビデの前に立って語りました。ある裕福な人が自分の持っている家畜を惜しんで、隣の貧しい人が持っていたたった一匹の小羊を奪って客に御馳走をした、というナタンの話を聞いて、ダビデは激怒し、「そんな男はすぐに処罰せよ」と言った時、ナタンはすかさず「その男はあなただ」と告げたのです。「その男はあなただ」と言われるまでは、自分のしたことの重大さに気がつかなかったのです。悪いとは思っていたとしても、自分こそが神に裁かれるべき罪人だとは思わなかったのです。

パウロは、神の前に裁かれるべき人間について考える時、神に選ばれたユダヤ人と神を知らないギリシア人という、当時のユダヤ人が考えていた図式に当てはめるのではなく、「すべて悪を行なう者には、ユダヤ人はもとよりギリシア人にも、苦しみと悩みが下り、すべて善を行なう者には、ユダヤ人はもとよりギリシア人にも、栄光と誉れと平和が与えられます」（9-10 節）と言い切りました。もちろん、ユダヤ人が神の救いの歴史において特別な使命に召されていたということは、聖書が書いておりですが、選ばれたというのは使命へと召され、大きな責任が与えられているということなのです。神はユダヤ人もギリシア人も分け隔てなくお裁きになるお方なのです。

「神は人を分け隔てなさいません」と語られます。「分け隔てする」という語は「顔を重んじる」という言葉です。顔のよしあし、表面的なことだけで、神は判断して裁かれることはないということです。それは当然のことだと私たちは考えるかもしれませんが、けれども、私たちが神のかたより見ないまなざしにいつも納得するか、満足するかという話は別です。何でも自分中心にしか見たり考えたりできない私たちにとってはなかなか難しいことかもしれません。

主イエスが語られたぶどう園の労働者のたとえ（マタイによる福音書 20 章）があります。夕刻にやって来て少しだけ働いた労働者にも、ご主人は朝早くから来て働いた労働者と同じ賃金を支払ったという話です。この世的にはありえない話ですが、そこに神の国の真実が輝き、すべての者を裁き、すべての者を救われる神の、私たちの思いをはるかに超えた豊かさが現されています。

「神は人を分け隔てなさいません」。この事実を最もはっきりと知らされる場所があります。それは主イエス・キリストの十字架です。神が分け隔てされない方であることは、神の御子である主イエスが十字架につけられて殺され、すべての人のために死んでくださったということの中にはっきりと表わされているのです。主の十字架において、そこに下された神の怒りと裁きから逃れられるほどに正しく清い人間はいないことが示されたのです。神の御前にそのままでは顔を上げて立つことのできない私たちです。そこにはユダヤ人もギリシア人も、キリスト者も無神論者もありません。しかし、神はそのような私たちを憐れんでくださり、私たちに対する神の怒りを御子イエスの十字架の上に下されたのでした。主イエスが私たちの罪のすべてをご自身の身に負って死んでくださったのです。そこにすべての人の罪の赦しの道が開かれたのです。私たちの救いは、神の豊かな慈愛と寛容と忍耐によって、主イエス・キリストを通して与えられたのです。主イエス・キリストの十字架と復活によって示された神の裁きと赦しの豊かさに、いよいよ目を開かれていきたいものです。